

提言 8

一人ひとりを肯定し、尊重する評価を！

- 文科省は、「主体的・対話的で深い学び」を行う目的をこれからの時代に求められる「資質・能力」を育むためとしています。この「資質・能力」を中心とする教育課程は、「何ができるようになったか」で子どもたちを選別することになる危険性があります。私たちには、長年にわたって教育研究活動で積み上げてきた多くの実践があります。そこでは、「何ができるようになったか」ではなく、子どもたちの学びの過程が重視されてきました。そして、それはこれからも重視されるべきです。
- そもそも一人の子どもの全てをとらえることは難しく、私たちはそのことを忘れてはいけません。「テスト」によって数値化されたものを重視しすぎると、一人ひとりの子どものゆたかな学びを実現できないことはおろか、現場での実践は「テスト」対策に偏り、歪んだものになる恐れがあります。また、「何ができるようになるか」という観点が先立つ学習では、必然的に「できない子ども」を生み出すという危険性を、私たちは自覚するべきです。
- インクルーシブでゆたかな学びを創造するためには、育成すべき「資質・能力」の前に、一人ひとりの子どもが肯定され、尊重される教育が大切です。目標準拠評価が強調されると、多様な子どもの姿が見落とされることになりかねません。その点で、目標準拠評価とともに、ゴール・フリー評価や個人内評価を重視する必要があるでしょう。また、評価の枠組や方法を子どもたちと一緒に考えて、子ども自身が主体的に自らを振り返り、次の見通しが持てるような評価のあり方も考えていきましょう。

